
夢追人たちの足跡～小説マジカルバケーション～

莉紗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢追人たちの足跡／小説マジカルバケーション／

【NZコード】

NZ8475N

【作者名】

莉紗

【あらすじ】

悲劇の戦争から15年後。国外れの小さな村から、歴史は動き出す。

ミルフィーコは大魔法使いグラン・ドラジェに連れられて、魔法学校ウィルオウイップスへ入学する。ある日、15人のクラスメイトと臨海学校としてヴァレンシア海岸へ。しかし大変なことが起こります。…

謎の生き物、飛び交う魔法、次々と明かされる驚愕の事実。

ミルフィーユと15人のクラスメイトの真実を知るための旅が今、
幕を開けた。・

キャラクター設定（前書き）

夢追い人たちの足跡…でのキャラクター設定です。
ゲーム版知ってる方は内容が全く同じなので飛ばしちゃってください！

キャラクター設定。

ミルフィーゴ・レトゥニア

今作の主人公。15歳の女の子。属性は水。最初はね。肩くらいの金髪に深い青の瞳、可愛らしい帽子。明るくて元気、底抜けに。あと足技も得意。精靈が見える。

カシス・ランバーヤード

16歳の男の子。属性は刃。剣の一族ランバーヤード家後継者。女たらし傾向有り…つてのは表面上?腰より下まで伸びた癖のある銀髪、紫の瞳。

ブルーベリー・レイクサイド

代々国王の側近として仕えてきたレイクサイド家のお嬢様。属性は水。ミルフィーゴと仲良し。体が弱い。15歳。ブルーベリー色の髪と瞳。

シードル・レインボウ

14歳の男の子、痛烈な皮肉屋。属性は美。芸術に関してはいわゆる天才。10歳で個展を開きました。カシスとは気が合つ。金髪に黒い瞳。

ピスタチオ・メイプルウッド

ヴォークスと呼ばれる種族の少年。属性は木、語尾は「～っぴ！」
学校での成績は…落第寸前。

キルシュ・ピンテール

15歳の男の子。元気いっぱい、属性は火。少し長めの金髪を後ろで編み込み（ローランシア）、黒い瞳。この頃キャンディーに夢中。

アランシア・スコアノート

15歳の女の子。キルシユとは幼馴染み。属性は音。黒髪に黒い瞳。ただ今キャンディに嫉妬中。楽器ならどんなものでも弾きこなせる、天才。

キャンディ・ミントブルー

13歳の女の子。属性は風。くすんだ金髪に水色がかつた黒い瞳。ガナツシュー筋で、グラン・ドラジェがデザインした服をそつなく着こなしている。

ペシュ・ファーマー

愛の大天使、という種族の女の子。クラスの中では一番常識に近い。属性は愛。とにかくかわいいの一！b yミルフィーゴ

カベルネ・チープトリック

イタズラ大好きパペツトの少年。属性は毒。語尾は「～だヌ～」。兄のシャルドネが行方不明。

レモン・エアサプライ

ニヤムネルト属の格闘技一家に生まれた娘。属性は雷。とにかく喧嘩っぱやい。ミルフィーコとブルーベリーとは大の仲良し。

オリーブ・ティアクラウン

人の心を読むことのできる、11歳の気弱な女の子。属性は獸。深緑色の髪と瞳。ガナツシューを兄のように慕う。

ショコラ・クラックス

マッドマンという種族。属性は石。のんびりマイペースで、ウィルオウイップスの近くの山に住んでいる。

カフェオレ・ラステイネイル

喋る古代機械。属性は古。12000年前に作られたらしく、グラ
ン・ドラジュが骨董市で200プレーで買ってきたとか。

セサミ・ッシュポッド

10歳の虫大好き少年。キルシユの子分的な存在。属性は虫。金髪
前髪ぱつとに、緑色の瞳。

ガナッシュ・ナイトホーク

15歳の少年。属性は闇。クラスの成績はトップ。一人でいること
を好むが、面倒見はいい。3年前、キャンプから帰つて来た姉が国
に捕まってしまった。緑がかつた黒髪に、黒い瞳。

キャラクター設定（後書き）

やつとかけた！フルネームとか、覚えてませんでしたみんな」「めん…

今知ったけどシャルドネってヴァーラの恋人だつたんだねえ。うつり、切ないよ…

ではでは～

そのせじまい 1（前書き）

書いてみたかつたマジカルバケーション。なかなかマイナーなゲームでして。

でもすぐお勧めなんです！
よし、頑張つて書くぞー！

真実を知る旅が 幕を開けた…

この世は多くのプレーン、すなわち世界、が重なって出来ている。火のプレーン、水のプレーン、闇のプレーン…。

その一つ、物質のプレーンに存在する魔法王国、コヴォマカ。そこでは人々が自分に合った属性 風、火、古、雷、水、獣、木、音、美、刃、毒、虫、愛、石、闇、光 の魔法を使って生活をしていた。ある者は火を、ある者は獣を。

人々の大半は知らなかつた。魔法は精霊の力を借りるからこそ成し得る奇跡だということを。

強い力に目が眩んだいわゆる「上級魔法使い」たちは次々と人ならぬもの、「エニグマ」と融合していった。エニグマの操る闇の魔法は、光以外の魔法に対し強い力をもつのだ。しかし人外の力を扱えた人間はほんのわずかで、大半はエニグマに意識を乗っ取られてしまった。人間と融合したエニグマは様々なプレーンを行き来することでが出来るようになり、ついにコヴォマカで戦争を起こした。多くの魔法使いや兵士が戦つたが、エニグマの放つ闇魔法は強力だった。多くの命が、儚く消えていった。しかしコヴォマカ国は「魔法の実験が失敗したのだ」と国民に事実を隠した。エニグマの存在を知られてはならなかつた。よもやこの世が人ならぬものに征服されてしまうであろう恐怖など。

そんな国に対し怒りに拳を震わせたのは、一人の魔法使いだけであった…

悲劇の戦争から15年後。国外れの小さな村から、歴史は動き出す。

「またあいつだ。」「変だよなあ、精霊だつて。」

「居るわけ無いのにね。」

子供たちが遠くから見つめるのは15歳の少女。肩まで伸びた金髪はあちこちに跳ね、深い青をたたえた目はキラキラと輝いていた。

「おはようーみんな。今日もいい朝だね。」

何も無い空間に手を伸ばす少女。

「今日も精靈さんとお喋り?」

「ミルフィーゴには精靈さんが見えるんだよねえー、すうーい。」
子どもたちがキャハハハ、と笑う。ミルフィーゴと呼ばれた少女は
しょんぼりと地面を見つめた。その目には石の精靈が映っていた。
落ちていた木の枝には木の精靈が宿っていた。

ミルフィーゴは両親の顔を知らない。物心つく前に叔父の家に預けられたのだ。叔父は男手一つでミルフィーゴを育てようとした。しかし彼女が5歳になる前にこの世から去ってしまった。原因は…「魔法実験の失敗」による怪我。何も分からぬままミルフィーゴはこの世に一人、放り出されたのだ。

「ミルフィーゴ。」

叔父は死ぬ直前、彼女を抱きしめながら言った。

「魔法使いになる上で避けては通れない門、それが『エニグマ』だ。
しかし彼らを恐れるな。お前には何か特別な力がある。多くの精靈たちの力を借りて生きるのだよ。」

叔父の亡くなつた夜、初めて一人で寝た。寒くて暗くて何より不安だつた。

そんな時だつた。ミルフィーゴの手を何かがくすぐつた。

「…っ！」

ガバリと跳ね起きた。目の前に居たのはライオンと魚をくつつけたような可愛らしい生き物。水の精靈フローだつた。その日から彼女の眼には精靈たちが見えるようになったのだ。

「そうだよ、みんないるの。魔法はね、精靈さんがいるから存在出来るんだよ。」

どうせ信じてくれない、でもいい。私だけでも、彼らと仲良くな
りたい。ミルフィーゴはにっこり笑つて言った。

「…のわりに、お前魔法使えねーよな。」

「パパやママに教えて貰えればいいのにねー。」

「キヤハハ、と子どもたちはまた笑つて走つて行つた。」

「お父さんやお母さん、どんな人だつたんだろうね。」

ミルフィーゴはぽつりと呟いた。フローは優しい眼で彼女を見つめ
ていた。

やのせじまい 1 (後書き)

いやー、魔法のシステムとかなかなか難しいなあ。ドラクエと違つて魔法主だもんね。ま�なんとかなりますか。
うわーーすごい今わくわくします。

そのせじまり 2（前書き）

突然現れた大魔法使いグラン・ドラジエ。優しく微笑んで彼は言つ。

さあ、全てが始まる時だ。

ミルフィイーコの過去編、完結。

「君は、精靈が好きかい？」

ハツとして顔を上げると、いつの間にか年老いた紳士がミルフィーユの前に立っていた。

少し滲んでいた視界を瞬きして治し、元気な声で答える。

「ええ！」

「もつと精靈と仲良くなりたいかい？」

「ええ！もちろんよ！」

ミルフィーユには見えた。老紳士の周りに飛び交う精靈たちが。

「君は……いや、何も言つまい。まるで磨かれていない原石を見つけた気分だ。」

嬉しそうに笑う老紳士を不思議そうに見上げた。ぽん、と頭に手が載る。

「そつ、君はまるで磨かれていない原石だ。

魔法を、この世界の本質を、学んでみようとは思わないかい？」

「…？」

夢にまで見た魔法。薪に火を着けたり、風を巻き起こしたり。

親が子へ教えることが多く、ミルフィーユは魔法を習つことが出来なかつたのだ。

「私は魔法学校ウィルオウイスプ校長、グラン・ドラジエ。」

につこりと微笑む老紳士。

「え、え、えええええ！う、うそお！」

こんな、こんな普通の！？あの大魔法使いグラン・ドラジエ…。

ゴヴォマカに魔法を持ち込んだ人と言われ、「魔法実験の失敗」が最小限の被害で済むように走り回つた魔法使いである。

「何もそんなに驚かなくて。さあ、君をウィルオウイスプへ招待したいのだが、如何かな？」

気がつけばコクリと頷いていた。グラン・ドラジエは笑顔で彼女の

頭を撫でる。

「私の学校を出た者の多くは国の要職に就いている。しかし私はそんなことのために魔法を教えているのではない。」

蒼灰色の瞳がミルフィーコを見つめた。

「私が君に教えたいのは全て。この世の全て。全てを学び終えたあとの君は、世界を意のままに操ることが出来るだろ?。」

深い青をたたえた瞳が見開かれた。ついでに小さな口も。老紳士は口元を綻ばせた。

さあ、全てが始まる時だ。

そう呴いた口調は、大好きだった叔父にそっくりだな、と思いながら老紳士の後を追うミルフィーコだった。

そのまじまり 2（後書き）

いやーマジバケ知つている人がいた！すぐ嬉しい！ただ感動！
読んで下さった方々、ありがとうございます。

次からやつと現在（？）に入ります。ヴァレンシア海岸レッジゴー！
あ、その前にキャラクター紹介書かなきやね。

今年最後の更新かなあ。一応書いておこう（＾＾）

良いお年を…来年もよろしくお願ひします！

そのせじまい 3（前書き）

さて、キャンプ当日になりました。
マド先生クラスのみんなは天才です。

多くの生徒が通うなか、あたし、ミルフィーゴが所属することになったのは担任がマドレーヌ先生のクラス。他に15人のクラスメイトがいる。みんな、校長グラン・ドラジエが直々に学校へ招待したらしい。…この事が地味にすごいと思うのはあたしだけ?まあそれだけあってクラスはとても個性的。代々コヴォマカ王の側近として仕えるレイクサイド家のお嬢様、ブルーベリー や、剣術を極める刃の一族、ランバーワード家のカシス。詩や絵画に興味を持ち、10歳で個展を開くほど類い稀な才能を持つシードル、音楽一家に生まれ樂器ならほとんどを弾きこなす、天性の才能をもつアランシア。かとおもえれば、マッドマン 身体が土でできている熊の様な種族だのショコラやパペット 魂の入った人形 のカベルネ、愛の大天使ペシユ、ヴォークス 犬と人間の中間の様な種族 のピスタチオといった人間ではない者もいた。極めつけは喋る古代機械カフェオレだ。骨董市でグラン・ドラジエが見つけてきたらしい。最初は驚いたし、自分はここにいるべき存在じゃないとthought。このクラスにいるみんなはいわゆる「天才」だったから。

いや …… ! あたしが悩むなんて性に合わない つ!
よつしゃあ、極めてやろづじやないか魔法とやらをさー!

んで気付けば、ウイルオウイスプへ入学して数ヶ月が過ぎてた。

「ミルフィー！ピスター！バスが来るぜ！」

「ひやつほー！キヤンプだぜ！」

いやにテンションが高いキルシユとセサミが教室に入ってきた。

「オイラ、キヤンプなんか行つてられないつぴ。落第して家に連れて帰られちゃうつぴ。」

目の前の魔動人形(マジックドール)、カラマリイを睨みながらヴォークスのピスター

オが言う。

「ピスならだいじょーぶよー」

「ミルフィイは能天氣すぎるんだつぴ！ オイラの立場も考えるつぴー！
何やつてるの？ もうすぐ出発よ。」

優等生のお嬢様、ブルーベリーが親友のレモンと共に歩いてきた。

「ホント、お前らグズだよなあ。なんとかなんねえのか？」

ニヤムネルト族 猫と人間の間のような種族だ らしい男勝りな口調でレモンが口を開けば、

「あたしもグズ！ ？ レモンちゃん言つね」

「なんだつてえ！ ？ 僕がグズならピスタチオはどうなるつー！」

「おいつ！」

突つ込む一同、落ち込むあたし、燃え上がるキルシユ。しかし彼も、

「おはよー！ みんなここにいたんだー。」

キャンディには一途である。

「あれーカラマリイー？ 誰か補習？」

カラマリイはウイルオウイースプが所有する魔動人形(マジックドール)で、成績下位者はこれと闘い、負けたら落第なのだ。

「オイラ落第はいやだつぴー！ 強くなつてカラマリイにも、キルシユやミルフィイにも勝てるようになりたいつぴー！」

「んじゃさ、今からのキャンプでヴァレンシア海岸にいくでしょ？ くるりとキャンディは振り返つて、

「みんなでめいっぱい魔法を鍛えようよ！ そんでガナッシュにも勝つー！」

「うはつー目標高いね。」

「ミルフィイユ様が何をおつしやる。」

「ガナッシュには敵わん！ あいつ絶対いつか倒す！」

「……おーい、ガナッシュはラスボスじゃないぞ」

「目標が高いのはいいがせめてキルシユにしつけよ。」

「どういう意味だよ！ 僕に勝つのは大変だぜー！」

「それなら私も少し体を鍛えようかな。走り回る監を見てるだけじ

やつまらなーし。」

「はははは、田標かあ。私は、うーん、告白かなあ。告田できたらいいなあ。」

「ドキッ！—」

飛び上がるキルシユ。みんな分かりやすいねえ。

「来たぜ来たぜ！アーキー！」

「キルシユも！？あ、アランシアにか。聞くまでもないよねー。」

「あ、アランシア！？いや、アイツとはただの幼馴染みで。」

「お互い頑張りつつ！—」

キルシユ沈没。

「キャンディは誰につぴ？」

「男の子にはないしょ！今夜海岸のコテージで女の子だけで話そつ！」

相手はきっと ふふ、あいつだな？

「さんせー！—」

あたしと、ブルーベリー、レモンの声が重なり、うわーっと全員で教室を出た。

やのせじまつ 3 (後書き)

これ、光のフレーン行くまでこちへ話へりこ費やしあう
長々しあがかなあ？

いひー。

そのせじまり 4 (前書き)

「おはよう久しづり！」

音楽室の余話題。

カシスとシードルの「ノン」大好きだ…
さて、もつちぐ魔バスが出発…するか？

「こんなところでなにしてますのー・バスが来てますのー・」

可愛らしき愛の大天使ペシュが飛び掛かつてきた。

「ゴメンゴメン。話が盛り上がっちゃって。」

抱きついたペシュをひっぺがす。あー可愛いわあ。愛の大天使…つて
いつ種族らしいけどすっごく可愛い！　ただし愛の大天使の男の子
は不細工らしいね。あはは～

「ヒヨアアアアー！」

喋る古代機械カフェオレが一階から掛け降りてきた。

「オンガクシツデ、ミンナガコワイハナシヲスルンダ。」

「いいからバスに行くですのー・ミルフィちゃん、音楽室の皆をお願
いですのー！」

「んじゃあたしらは先行つとく。またバスでね。」

「はいはーい。」

元気良く返事をして音楽室に向かった。

「そんなのウソだよ。」

小さな赤い帽子が金髪によく映えるシードルが言ひ。

「だつてそれが本当なら…」

「毎年のようにヴァレンシア海岸に行くわけないってか？この時期
には毎年門が破壊されるって言つし…絶対に何かあるぜ。」

口が悪いのは腰を悠に過ぎた癖のある銀髪が目をひく、カシスだ。

「キャンプで毎年誰かがいなくなってるのが本当だったら…じゃあ
誰がいなくなつたのさ？」

「ガナッシュの姉さんが……三年前、キャンプから帰つてきてすぐ
家出しちゃつた。」

オリーブが深い緑の瞳が弱々しく揺らしながら言つた。

「でも、キャンプとは無関係じゃないか。」

あちゃー、こっちでも違う方向で話が盛り上がりちゃつてますか…

音楽室に入つても、話に夢中で誰一人気付かないし。声掛けようにも掛けれないー！…否、訂正。アランシアだけはハープを弾くのに夢中だ。

「わかつたわかつた、ガナッシュュに聞けばいいんだろ？ガナッシュュはどこさ？」

「アイツが家族の話なんかするワケねえだろ？キャンプもフケる気だぜ。」

「うそつ！」

「カベルネに聞けばいいんじやねえの？」

「あの子来ないの？」

「カベルネに？あれ、カベルネもどこさ？」

「おーい。」

「行こうぜ、ミルフィイが呼びに来てる。待たせちゃ悪い。」

「無視すんなつ！」

ミルフィイーゴのこうげき！…ミス！…カシスにダメージを与えられない！！

「こめ。」

カシスとシードルが揃つて言ひ…笑顔で。絶対悪いと思つてない面白がつてゐるぞこいつら。

「んーいいよー…あとは、カベルネ？」

彼なら…ああ、下の教室か。階段を降りて左手の大教室に5人は向かつた。

予想通り、カベルネは大教室の一列目、定位置で物思いに耽つていた。

「よつ、カベルネ。また兄貴のこと思い出してたのか？」

「ヌ～。ガナッシュュの姉キは学校をやめたあとも、時々この教室にオレの兄キに会いに来てたんだヌ～。」

紫色の瞳がゆらゆらと揺れる。

「でも『ヴァーラは様子がおかしい、何かあつたんだ！』って追いかけて行つたつきり、帰つてこないヌ～。」

「もしかして……泣いてたの？」

アランシアが心配そうに問う。

「そんなこと無いヌ～！」

「お兄さんのこと、思い出してたのね……。」

オリーブが優しく言つた。

「さあ、行こ！みんなで。」

「そうだ、行こうぜカベルネ、海に行つてパーティーと忘れちまえ。」

「バスの中でたっぷり話をしようよ。」

シードルの言葉にカベルネは大きく頷いた。

そのまじまり 4（後書き）

「うわー！ミスター！」と今氣づきました。
はい、女主人公の名前についてです。お氣づきの方いらっしゃるかもしれません。

…はい、トルーナ村でのサブキャラ。ミルフィーゴドでしたね…。ついでトルーナでは「ミルフィイ」と記述をせて頂きます。
悲しい！忘れてた！自分的にミルフィィーゴ（ペベットの）とトイラミスは大好きなのに…。ついで

と落ち込みつつ。そろそろ挿絵というのも入れてみたいと思つた休日でした。
ありがとうございました～！

そのせじまい 5（前書き）

長くなつてすみません、やつと今回で出発します。

その前に少し…ね

オリーブの予知能力びびびーーー！

今回から「夢追人の手帳！！」を記録していきたいと思います。
マジバケ知らない方にも楽しんでいただけたらな、と思いつつ。
いや、しゅっぱーつ！

「……つー!!ルフィ、職員室に寄りさせてー!」

突然の声に飛び退く。いつもは静かなオリーブのことだから余計に。「どうした?」

「マドレーヌ先生の…心の声…。」

彼女は人の心が少しだが、読める。

「落ち着いて。」

「残り半分の生徒を、生徒を見捨てる…?」

ガタガタと震えるオリーブ。あたしはその小さな体をそっと抱き締めた。

「誰か、彼女をバスまで。職員室見てくる…。」

「俺も行く!」「ボクも~。」

「でもそれでは生徒が…。」

「わしは、君なら出来ると信じておる。」

校長グラントリジンと担任のマドレーヌが話していた。

「しかし…危険すぎます。」

「だからクラス全員とは言わんのだ。強い魔法使いが必要なのだ。軍には信頼できるほどの力はない。」

「見捨てるのですか!??」

「彼らなら大丈夫じゃ。危険なのは重々承知しておる。…急がねば15年前の悲劇の再来となるのじや…!」

黙りこくるマドレーヌ先生。あまりのことに呆然としているとカシスに手を引っ張られた。

「おい!大丈夫か?」

「ただのキャンプじゃない?見捨てる?一体何が起こるっていうんだろ…!」

「このキャンプは危険な香りがする~。魅力的だからといって手を

伸ばせば棘で刺される、薔薇のようにな。

「シードルの才能にかかるば何でも詩的に…つても、ガナッシュ、本当に来ない氣？」

「ああ、さつきの話聞いてたのか。」

「少しね…一人とも先にバスへ乗つて、あたし行つてくる。…彼ならいざという時に頼れるしね。」

走り去るミルフィーユの後ろ姿を見送るカシス。

「そうだよな、お前ならそうするか。俺じゃまだまだか。」
その顔に浮かぶ彼らしくない表情に気付けたのは、なんやかんやあつても気が合つシードルだからであった。

一帯に流れる切なきハーモニカの調べ…全身を黒で統一した少年は木の下で一人、ハーモニカを吹いていた。

「こんな所にいたのね。」

「……っ！」

少年が目にしたのは、可愛らしい帽子を被つた少女。

「ミルフィイ、か。驚いた。」

「お姉さまのこと、考えてた?」

「ああ。」

遠くを見つめるガナッシュ。その横顔はとても同じ学年だとは思えない、闇を抱えていた。

「ガナッシュ、キャンプ来ない?」

「そのつもりだ。どうせ何もないわ。」

「ダメだつ！ 来いつ！」

「え、ミルフィイってこんなキャラだつたか？」

「オーラー卜の様子が変なの。マドレーヌ先生の心を聞いてから。」

「あたしにだつて分かる。これから何かが起こる。」

「姉貴が消えたみたいに、か？」

「わからない…。」

やだ、弱気な自分なんて…。
気付けば自分の声が震えていた。

怖い。

「みんな…いなくなつてしまつ…助けて、怖いよ。」
ガナッシュは静かにあたしの肩に手を置いた。

「分かつた、バスはどこだ。」

そう言って微かに笑つた。

かくして、バスは出発した。マドレーヌ組16人全員を乗せて。学校の門を破壊しちゃったのは…カシスの表情かおが面白かつたなあ。シードルはまた歌い出し（自作だけどね）、キルシュとキャンディはテンション凄いし。これから起こることを誰が予想できるだろ？
未熟な子どもたちが予想できるはずがなかつた。

そのはじまり 5（後書き）

夢追人の手帳！！1ページ目は「マジカルバケーション」担当は私、莉紗です。えっとですね、マジカルバケーション、通称マジバケは…2001年12月07日、BROWNLIE BROWN（ブラウニー・ブラウン）から発売されたGBA版ソフトです！BROWNLIEとは働き者の妖精のこと。CMには若き日の中島美嘉が出演。びっくり。「最も強い武器は『友情』だ」のキャラクチコピーのもと、美しいグラフィック、個性豊かなキャラクター、そして何より感動的なストーリーで、発売10周年を迎えた今でも人々を魅了し続いているゲームなのです！私がドラクエとともに愛して止まないソフトです。

いかがでしたか？こんな風に続けていきたいと思います。担当は各ページで変わる予定！内容は…ふふふ

ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8475z/>

夢追人たちの足跡～小説マジカルバケーション～

2012年1月14日21時56分発行